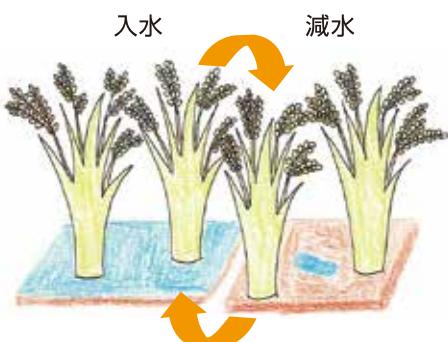




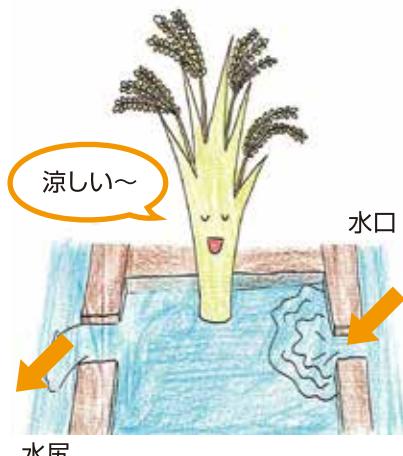
水稻の高温障害対策について

水稻は「出穂期」を迎え、穂に炭水化物を送り込んで栄養を溜め込む「登熟期」に入ります。水管理と刈り取り時期に気をつけ、高温障害による白未熟粒を減らすため対策をしましょう。



間断かん水…3cm程度に水を溜め、
自然に水が無くなったら
再び水を溜めることを繰り返す。

出穂後25～30日以降は「間断かん水」をして、根に酸素を補つて株の活力を保ち、登熟をよくしましょう。



出穂後、日中の気温が35度、夜温が25度を超える日が続くとき、自由に用水を使える場合は、出穂後10日から20日頃に用水のかけ流しをして稻の温度を下げましょう。

用水のかけ流しをする



イラストと写真:JA越前たけふHPより引用

落水後の水分は、表面に小さなひびができる、わずかに足跡が付きその跡に水が溜まる程度が目安です。

落水が早すぎると登熟が進まず、白未熟粒が多くなります。落水は、収穫作業に支障がない限りできるだけ遅らせましょう。出穂後25～30日くらい、収穫の1週間前まではなるべく水を溜めましょう。

落水ができるだけ遅らせて、水を保つ

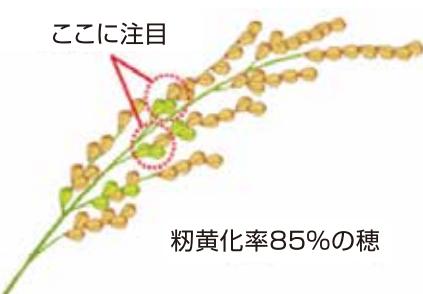
適期に刈りとる

△青味粉10～15%の状態



写真:JA大阪中河内ブログより引用

△粉黄化の判断位置



粉黄化率85%の穂

収穫が遅れると、白未熟粒のほか胴割れ粒（米の内部にひびが入った粒）も増えてしまいます。収穫は、黄化粉の割合が85～90%になつた頃が適しています。目安は、穂元に青味粉が10～15%残つたくらいです。圃場の何ヶ所かで、5～6本の平均的な生育状態の穂を束ねて手に広げてみて、判断しましょう。



収穫適期の株から平均的にもみがついている穂を選んでバラバラにし、1本あたりのもみ数を数えてみましょう。

面積当たりのもみ数が多くの何粒かで、80粒です（平成30年産）。はいっそもみ数を抑える対策に取り組んでみましょう。

もみ数を数えて、来年の米作りの参考に！